

Shibusawa Eiichi and Mito School: The
Ideological Influence of Fujita Touko's
Kaitenshishi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大江, 清一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1540

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



渋沢栄一と水戸学思想

— 藤田東湖『回天詩史』の思想的影響 —

Shibusawa Eiichi and Mito School

The Ideological Influence of Fujita Touko's *Kaitenshishi*

大江 清 一

OE, Seiichi

本稿の目的は、渋沢が影響を受けたと考えられる藤田東湖(以下「東湖」)の主要著作について、(1) 尊皇攘夷思想に対する基本的な考え方、(2) 武士道と陰徳に関する理解、(3) 渋沢に顕著な影響を及ぼしたと推察される考え方の3点を分析視角として検討し、その結果を渋沢の著作や言行録および事績と比較して水戸学の渋沢思想への影響を探ることである。

回天詩史の影響には、(1) 武家と農民という藤田と渋沢の身分の違いからくる解釈相違によって意図せざる結果として生じた横浜焼き討ち、(2) 両者間で相似する尊皇思想、歴史観、(3) 両者間で認識が異なる宗教観などが明らかになった。

今後は、(1) 尊皇攘夷思想に対する基本的な考え方、(2) 武士道と陰徳に関する理解、(3) 渋沢に顕著な影響を及ぼしたと推察される考え方の3点について水戸学思想を正確に把握すべく考察を進める。

はじめに

本稿の目的は、渋沢が影響を受けたと考えられる藤田東湖(以下「東湖」)の主要著作について、(1) 尊皇攘夷思想に対する基本的な考え方、(2) 武士道と陰徳に関する理解、(3) 渋沢に顕著な影響を及ぼしたと推察される考え方の3点を分析視角として検討し、その結果を渋沢の著作や言行録および事績と比較して水戸学の渋沢思想への影響を探ることである。具体的には、渋沢が耽溺した回天

詩史の思想を考察し、渋沢に影響を与えた水戸学の思想を体系的にたどるための端緒を探ることである。

このアプローチによって渋沢に対する水戸学の影響を探れば、概括的に把握した渋沢思想と水戸学の関係性を段階的に詳細化し、渋沢が水戸学から受けた影響をより厳密に検討することができる。

渋沢は東湖の著作に青年期から深く親しんでおり、その影響は著しく大きかったと考えられる。渋沢が青年期に受けた水戸学思想の

キーワード：水戸学、藤田東湖、尊皇思想、攘夷思想

Keywords : Mito school, Fujita Touko, The thought of reverence for the Emperor, The thought of the expulsion of foreigners

影響は深甚である。それらは大きく「生涯を通して影響が継続した思想」と、青年期において実践を試みたものの目的を果たせず「一過性に終わった思想」の2つに分けられる。

管見によると、前者が渋沢思想の中核を形成する「国臣意識」や「陰徳」につながる「尊皇思想」と「武士道」であり、後者が「攘夷思想」である。しかし、この見解はあくまでも前著の『義利合一説の思想的基盤』と『渋沢栄一-の精神構造』によって析出されたものであり、この2著作では水戸学の影響が十分考慮されていない。

本稿で取り上げる東湖の代表的著作は漢詩で書かれた『回天詩史』である。渋沢は従兄の尾高惇忠と連れ立って上州や信州の農家から藍を集荷する道すがら漢詩の詩作を楽しんだ。また、徳川昭武に随行した訪仏の往路でも、フランス語の修得より漢詩の詩作に熱中していた。つまり、漢詩という形式によって記述された思想や心情は通常の文体よりも渋沢に深く浸透したと考えられる。本稿では回天詩史の内容理解を重視して書き下し文を引用する。

第1節 『回天詩史』の背景

1-1 藤田東湖の死生観

回天詩史には東湖の死生観が反映されている。回天詩史に記述された内面の煩悶からは東湖の死生観がうかがわれる。東湖は、「古人言へるあり。『死生も亦大なり』と。彪平生に生れ、齡強仕に盈たずして、而も三たび死生の間に處す。豈天彪の生きて世に益無きを厭ひ、挈て之を冥漠の郷に投ぜんと欲するか。抑も人彪の冥頑不屈を惡み、必ずや之を死地に擠して、然る後己まんとするか。抑も亦彪愚暗剛褊にして、常に危機を蹈み、陥穽に臨

み、而して自ら悟らざるか。是に至りて彪復た人間の事に意なし。苟も餘齡を保ち、閉戸幽居、古人を尚友し、時に或は著作して憤を泄らし、首領を全ふし、以て先子に九原に従ふを獲は、則ち死すと雖も朽ちざるなり。感慨の餘り、筆を援きて之を録す。覺えず叙事冗長、而して亦削るに忍びざる者は、蓋し臣子の至情なり。時に五月十六日、梅雨濛々として黯雲慘慘たり。杜鵑其の間に悲鳴す。筆を投じて悵然たるもの良久し」と述べる¹⁾。

この記述に見られるように、東湖は三度死の淵に立たされたことをもって自省した。東湖は命拾いしたことを単純に幸運として安堵するのではなく、「天」の意思を慮る視点から自省している。

東湖が悩んだポイントは、(1) 天が自分に苛烈な経験をさせることによって罰を与えたのか、(2) 自分は苛烈な運命の下に生まれたにもかかわらず、今世で果たすべき任務があるがゆえに生かされているのかという2択であった。

東湖の死生観と渋沢思想に共通なのは、「天」と「自省」の概念である。渋沢は著作や回顧談で天の概念を引き合いに出す。一方、渋沢は一日の終わりに自省しその内容を日記に書き記すことを習慣としていた。しかし、東湖と渋沢の間にはこの2つの概念に対する認識の相違が見られる。

東湖は自分に対する「天の思い」を慮ったうえで、自分の行動が天の意向に沿うことができたか否かという点を、身を処するにあたっての判断基準としていた。つまり、東湖の判断基準は「天の思い」にあった。

対して渋沢は「天」を尊重する一方、日々自省するにあたって論語を中心とする倫理規範に沿って行動できたか否かという点にこだ

わる。渋沢には自らが信じる倫理規範に恥じない言動を行ってれば、天はそれに対して必ず合理的な判断を下して裁可を行うという信念があった。つまり、渋沢の自省の判断基準は「内面の倫理規範」である。

青年期の渋沢が東湖の死生観から影響を受けたとすれば、(1) 自分が心酔する東湖もまた人智が及ばない「天」という概念を信じていたこと、(2) 自省するという行為の大切さに気づかされたことの2点と考えられる。

1-2 回天詩史と渋沢栄一

渋沢が詩を重視する理由は明確である。詩の効用は多くの詩を暗誦することではなく、詩という形式をもってはじめて表現できる人情や自然を玩味し、政治の得失を理解することができる点にあると渋沢は述べる。そして、詩の特質を理解して味わうとともに、それを「隨時機宜に応じて専対すること」、つまり現実に対して臨機に応用することが重要と渋沢は強調する²⁾。

青年期の渋沢がこのような基本認識に基づいて、漢詩の形式で記述された回天詩史を読んだとすれば、渋沢が同書に記述された東湖の言葉を通して東湖と心情を共有するとともに、その政治思想を理解して実践しようと試みることは十分考えられる。

晩年渋沢は自分の愛読書が『回天詩史』と『常陸帯』であると語り、回天詩史については、聴衆の面前でその冒頭部分を朗々と吟誦した。つまり、青年時代に暗誦するほど愛読した回天詩史は、晩年に至るまで長期記憶をつかさどる渋沢の脳の海馬に定着していたことになる。

係る事情を勘案すると、愛読書であった回天詩史と常陸帯のうち、少なくとも本稿で取

り上げる前者の記述内容は渋沢の水戸学理解の基底を構成すると考えられる。

韻を踏んで心地よく響く七言古詩の形式で記述された回天詩史は、多少論理の飛躍があったとしても、その内容が若い渋沢の脳に情緒的な趣をもって浸透したことは明らかである。

第2節 藤田東湖の尊皇攘夷思想

2-1 水戸学の尊皇思想

2-1-1 君臣論と尊皇思想

本稿を契機とする筆者の究極の目的は、渋沢の国臣意識の淵源を探ることである。渋沢の晩年に成立した国臣意識は君である国家に臣として仕えるという意識である。国臣意識の基盤には君臣関係の存在があり、渋沢にとっての君は「皇室⇒一橋慶喜⇒徳川慶喜⇒明治天皇⇒国家」という変遷をたどった。

渋沢が君と仰ぐ国家は万世一系の皇室を頂点とする日本固有の成り立ちを有しており、それは尊皇思想によって支えられていた。しかし、具体的に仕える相手がいない農民であった時期の渋沢にとって、尊皇思想は皇室を漠然と尊崇すべき対象と捉えた観念論的な思想であった。

渋沢が理想としたのは、ヒエラルキーによって構成される組織体において、「和して同ぜず」を基本に「会同一和」によって物事を議論して推進することであった。維新後に創設された組織は官民ともに君臣関係を排除した形式的には民主的な仕組みで成り立っていた。

一方、回天詩史で展開される東湖の君臣論は、君である徳川斉昭を念頭に置いた具体的な君臣関係を論じるものであった。時を経て渋沢は斉昭の嫡男である一橋慶喜と君臣関係

を結ぶことになる。回天詩史で学んだ君臣関係のあり方を実地に体験した後の渋沢の尊皇思想は、維新时期をまたいで国臣意識に収斂した。このような論考をたどると、回天詩史で展開された君臣論は渋沢の尊皇思想が彫琢される端緒と位置づけられる。

東湖は君臣関係の理想について語る。東湖は君臣間で率直に意見を交換することの重要性を強調する。東湖が理想とする君臣関係は上下関係にある者同士が和楽をともにしつつ、同ずることなく堂々と自説を述べることができる関係を構築することである。しかし、そのような関係を構築することは対等な立場同士で関係を構築するよりはるかに困難である。その意味において、東湖が主張する君臣関係のあり方は理想型ともいえるものであった。

組織の上位者が権限を有するという意味で、「封建社会の君臣関係」と「近代社会の上下関係」を併置して比較した場合、上位者に対して臆せず自説を表明すべきとする東湖の理想と渋沢の理想は基底部分において重なっている。

東湖は臣として君にへつらうことがなかった事例として菅原道真を取り上げる。道真がもう少し器用に立ち回り、藤原氏の意図に沿って行動していたならば、大宰府に流されることもなかったが、それをせず徳義を貫いたことで後世に名を残すことになったと東湖は述べる。

渋沢は道真に対する評価を基本的に東湖と共有しているが、渋沢はその人物の死後に訪れる評価をより重視し、その理由を述べる。君と国のために正論を貫き、それがためにわが身が辺境の地に更迭され客死したことは、現世においては不幸とみなされる。しかし、徳義にかなったその言動は後世にながく語り

継がれ、人びとの心に刻み込まれることから、菅原道真のような人物が真の成功者であるというのが渋沢の考えである。節を曲げて得た一時の栄華は儂く、したがって、死後も語り継がれるような徳行を目指すべきというのが渋沢の主張である。

管見によると、渋沢は「三決死」（三たび死を決してしかも死せず）を厭わなかった東湖の姿勢を菅原道真と重ね合わせていたと考えられる。大宰府の地に客死した道真と三決死に臨んで恬淡と義を貫こうとした東湖は、渋沢から見るといずれも尊崇すべき先達であった。

東湖が貫こうとした義には、異人を殺すことによって国を守るという人倫に反する行為を義とするものも含まれていた。その点において、道真が貫いた義と東湖が貫こうとした義は異なるが、両者を重ね合わせた青年期の渋沢が両者の「義」を同根同義と理解して横浜焼き討ちという過激な計画を立てた可能性は否定できない。

2-2 水戸学の攘夷思想

2-2-1 藤田東湖の攘夷思想

回天詩史の冒頭には、「三決死」（三たび死を決してしかも死せず）という、愛国心に富む青年にとっては煽情的な記述が存在する。この記述は、東湖が死をも恐れず父幽谷の命に従い、水戸徳川家に対する忠義に基づいた思想信条を貫きたいきさつを述べたものである。この三決死のうち、異人が漂着した際に東湖が死を覚悟した事例において、幽谷が東湖に命じた内容が回天詩史に記述されている³⁾。

この事例は1824（文政7）年、現在の北茨城市にある大津港に漂着した異人を殺傷せよという父幽谷の命に東湖がしたがおうとして

未遂に終わったという内容である。

渋沢は上記の事実関係から様々な思いを抱かされたと推察される。若き渋沢が藤田父子の行動に感動したとすれば、以下の点が考えられる。

- (1) 死を賭してでも外夷を排斥しようという鞏固な「攘夷思想」。
- (2) 父の命にしたがう東湖の「孝の強さ」と「父子関係の堅固さ」。
- (3) 水戸藩上層部の放還方針に対してわが身を顧みることなく諫言をしようとする「犠牲的精神」。

内陸部の血洗島村にあって近海の外夷の恐怖に直接触れることのなかった渋沢が、生活実感にもとづいて攘夷思想を抱くことは困難であったと思われる。渋沢が東湖のエピソードから感動を受けたとすれば、それは「孝の強さ」、「父子関係の堅固さ」、「犠牲的精神」の3点であろう。

父の渋沢市郎右衛門元助を尊敬していた渋沢は、藤田父子の関係を、父と自分の関係にあてはめて理解した。論語に親しんでいた渋沢は「孝」の重要性を十分認識していた。藤田父子が発揮した犠牲的精神に対して若き渋沢が感傷的に同調したとすれば、このエピソードにおいて藤田父子が実践しようとした徳目と行動規範の対象となる攘夷思想は、渋沢にとって看過すべからざる重要な思想と映ったとしても不思議ではない。

藤田父子と渋沢父子の間で異なる点をあげるとすれば、それは藤田幽谷と渋沢市郎右衛門元助の現状改革に対するスタンスの相違である。藤田幽谷はこの事例のように、水戸藩の「放還方針」に対して、愛息の命も惜しま

ず打開を図ろうとした。それに対して、農民である渋沢市郎右衛門元助は武士による支配を受け入れ、現状に波風をたてないように無理難題を受け入れる姿勢を有していた。渋沢は父を尊敬しながらも、その父にない気概を藤田幽谷に見いだしていた。

論語等を通して学んだ倫理規範を実践しているのが藤田父子であり、渋沢がそれを鑑として実践しようとするれば、彼らの思想に同調する確率は高まる。若き渋沢には、道徳的に正しい道を歩んでいる人が信奉する思想は必然的に正しいと映ったと考えられる。

2-2-2 藤田幽谷の攘夷思想

東湖は父幽谷の攘夷論について幽谷作の漢詩を引用して語っている。幽谷が抱えていた懸念は、水戸藩の海岸に出没する外国船もさることながら、北海道をわが物にしようと画策するロシアの脅威に向けられていた。幽谷の発想は、水戸藩から目を日本全国に向けて国家の脅威に対処しようとするものであった。

国防の観点から日本に対する外夷の脅威を考えた場合、最も脆弱なのは松前藩という小藩が統治する北海道であり、幽谷はそのことを憂慮していた。幽谷作の漢詩の書き下し文は以下の通りである⁴⁾。

「春來り一夜斗杓を廻らす、北顧還た憂ふ胡虜の驕るを、筆を投じて自ら憐む班定遠、家を忘れて誰にか擬せむ霍嫫姚、長蛇應に憶ふべし神兵の利、粒食曾て資す瑞穂の饒かなるに、宇内至尊天日の嗣、須く萬國をして皇朝を仰がしむべし」

幽谷は、宇宙の北斗七星と瑞穂の国の恩沢という設定で、自らを機略に富み人間離れし

た英雄である嫫姚や定遠になぞらえている。この漢詩では、英雄であるはずの幽谷がロシアの脅威に手をこまねき悶々としている様子が伝わってくる。国家レベルの発想に基づく危機感を抱きながらも、現状の戦力でロシアを駆逐することができない幽谷の焦燥感を、息子の東湖は身に染みて感じていた。自著の回天詩史に父の漢詩を引用したのがその表れである。

尊敬する父が作った情緒的な漢詩を読んだ東湖は、国家レベルで日本の将来を憂える父のスケールに感嘆し、差し迫った外夷の脅威に対する問題認識を父と共有した。そして、父幽谷の漢詩に感動した東湖の著書を読んで感銘を受けたのが洪沢であった。

2-3 攘夷思想と尚武の精神

2-3-1 藤田東湖の尚武の精神

東湖は武士道について「尚武の精神」という観点から煽情的な文章で自説を展開する。そこにはかなりの決めつけと一方的な考え方が見られるが、強い信念に裏付けられた尚武への思いが語られている。

東湖が説く尚武の精神は、過去日本が武力を外夷の殲滅に行使したことを肯定する内容となっている。元寇に武力で打ち勝ち、秀吉の朝鮮出兵を肯定的に捉えるなどがその例である。

東湖の嘆きは、元寇と同様に異国が日本への侵略の意図を隠さず挑発している現状に対して、為政者たる幕府が優柔不断な態度をとり続けていることである。その原因は太平の世が長く続いたこともあるが、主たる原因は武家の精神の緩みにあると東湖は指摘する。

尚武の精神の緩みは、(1) 釈迦の柔和忍辱の教えが妥協を許さない毅然とした尚武の精

神を軟弱にしたこと、(2) 和歌を良くする者たちが淫靡な風潮を広めたことなどであり、それらの風潮は徳川時代にも引き継がれていると東湖は指摘する。つまり、「仏教の教義」と「風雅に流れる軟弱な気風」が尚武の精神の敵であるというのが東湖の主張である。

しかし、東湖が巧みなのは、「必ずや名を正さんか」という孔子の言葉を引用し、正名論に基づいて自分の主張の正当性を述べているところである。

若き洪沢が、東湖が主張する正名論をどのように解釈したのかは不明である。しかし、武士たる者はその名分を正すべきであるというのが東湖の主張であるとすれば、仏教の柔和忍辱の教えや軟弱な風潮から脱し、(1) 武士の本分である弓馬の道たる軍隊統率の道を整えること、(2) 奨学院別当の職を奉ずるからには五倫（親、義、別、序、信）の教えを明らかにすること、(3) 征夷大將軍の職を奉ずるならば夷狄征伐の制度を整えることの3点は、武士の本分を全うすべきという点においてきわめて真っ当な主張である。

武家に恐れ、回天詩史を暗誦するほど愛読していた洪沢にとって、正名論に基づいた反論の余地がない東湖の主張に賛同したであろうことは疑いがない。

2-3-2 横浜焼き討ち計画を支えた精神的基盤

洪沢は横浜焼き討ちを計画した時点の目的が、「攘夷遂行」と「封建打破」であったことを竜門雑誌で語っている⁵⁾。洪沢が東湖の正名論に影響されて横浜焼き討ちを計画したとすれば、「洪沢にとって『名』は何で、その名の下で『横浜焼き討ち』をどのような理屈で正しいと判断したのか」という点を明らかに

することが不可欠となる。

農民である渋沢にとって、農民という名をもって果たすべき本分は農業にいそしむことである。したがって、身分制度が為政者の意図通りに機能している平常な状態において、正名論に根拠を置いて横浜焼き討ちを計画することは困難であった。

したがって、農民である渋沢たちには横浜焼き討ちを正当化するに足る、本来の「名」を超越した「特別な名」が与えられなければならなかった。しかし、それは現実世界の誰からも決して与えられることのない名であったため、非現実世界の存在である神から与えられなければならなかった。それが決起に際して用意した「神託」であった。

正名論を体して横浜焼き討ちを計画した渋沢たちにとって、この神託は単なる檄文以上の意味を持っていた。それは横浜焼き討ちを自らの本分として正当化するに相応しい名を得るために不可欠なものであった。尾高淳忠が作成した神託は以下の通りである⁶⁾。

神託

一 近日高天ヶ原より神兵天降り

皇天子十年來憂慮し給ふ横浜箱館長崎三ヶ所ニ住居致ス外夷の畜生共を不殘踏殺し天下追々彼の欺に落入石瓦同様の泥銀にて日用衣食の物を買とられ自然困窮の至りニて畜生の手下に可相成苦難を御救被成候間神国の大恩相辨ひ異人ハ全狐狸同様と心得征伐の御供可致もの也

一 此度の催促に聊ニ而も故障致候者ハ即ち異賊の味方致候筋に候間無用捨斬捨可申候事

一 此度供致者ハ天地再興の大事を助成仕

候義に候得は永く神兵組と称し面々其村里に附て恩賞被仰付

天朝御直の臣下と相成萬世の後迄も姓名輝き候間拔群の働可心懸事

一 是迄異人と交易和親致候者ハ異人同様神罰可蒙儀ニ候得共早速改心致軍前に拝伏し身命を抛御下知相待候ハ、以寛大の神慈赦免可有之候事

天地再興文久三年癸亥冬十一月吉辰

神使等^⑨謹布告

右文言早速書写し寄場村々江無洩様触達可申候もしとりすて候者有之候ハ、立処に神罰可有之候以上

当所年寄共江

尾高淳忠は横浜焼き討ちに決起する者たちを「神兵」、異人を「畜生」と称し渋沢もそれに賛同した。神託の表現には幾分誇張があるにしても、渋沢たちは神兵である自分たちが害獣を駆除するため、その巢を焼き払うがごとき感覚で横浜焼き討ちを捉えていた。

神託の表現が誇張でない証左として、渋沢たちは武器を準備して具体的な進軍ルートまで事前に練って実行しようとしていたことがあげられる。

正名論に基づいて、武士の身分ではない渋沢が横浜焼き討ちというテロ行為を正当化することは不可能であった。したがって、この行為を正当化するためには、既存の身分制度を超越した概念によって自分たちを位置づけるとともに、駆除すべき相手を人間以下の害獣に貶めることが不可欠であった。

そして、そのことのために決して世間に受け入れられるわけがない理屈を考え出し、それを神託として流布した。つまり、神託は自分たちが実行しようとしている異常行動を正

当化する苦肉の策として絞り出した牽強附会の産物であった。渋沢たちは自分らの行動計画の異常さに気づくことなく、理屈にならない理屈で正当化した。

管見によると、正常な発想から生じたとは思えない渋沢たちの行動計画を合理的に説明するためには、「渋沢が水戸学によって洗脳されていた」と解釈する以外にないと考えられる。しかも、洗脳されたのは渋沢だけでなく、渋沢の漢籍の師匠である尾高惇忠やその親族もろかりである。

このように論考を進めると、「渋沢たちは水戸学によってどのように洗脳され、狂信者集団と化したのか」という命題を解明せざるを得なくなる。

2-3-3 攘夷思想を育てた特異な環境

テロは国家転覆を目的とした違法かつ暴力的な手段による現状変革であるという点において、渋沢たちが計画した横浜焼き討ちも同様である。しかし、渋沢が身を置いた教育環境はテロの専門要員を育成する環境とは異なっていた。テロ要員を育成するための環境は、テロを唯一の目的として作為的に用意された環境である。それに対して渋沢が置かれていた環境はいわば意図せざる環境であった。

しかし、作為・不作為の相違はあっても、渋沢が育った教育環境は、プロのテロリストが外界と隔絶された環境下で仲間と寝食をともにして閉鎖空間でテロの正当性を信じ込まされるという点において相似性が高かった。

渋沢が接触する仲間は尾高惇忠、尾高長七郎、渋沢喜作などの親族からなる集団であり、彼らが横浜焼き討ち計画の中核を担っていた。血洗島村は地理的には比較的江戸に近い場所に位置していたとはいえ、幕末当時の事情を

勘案すると、他藩と同じく情報過疎の状態に置かれていたという点で大差はなかったと考えられる。渋沢が江戸で逗留した千葉道場は尊皇攘夷論者の巢窟であり、開国論者と冷静に議論する機会は得られなかった。

このような環境下において渋沢たちは攘夷思想に感化された。しかも、武家であれば「本来業務としての夷狄排除」という名目が立つところを、農民の立場であるがゆえに事を起こすにあたって、自分たちの存在意義と行動意義を神託という形で正当化せざるを得なかった。

客観的に見ていかにも無理筋な状況下で、自分たちが義拳と信じるテロ行為を実行するには、よほどの確固たる信念が必要である。これらの点を考え合わせると、渋沢を含む横浜焼き討ちの首謀者たちには、「水戸学による洗脳」という事実が存在したと考えざるを得ない。

第3節 藤田東湖の歴史観と宗教観

3-1 藤田東湖の歴史観

藤田東湖の尊皇攘夷思想は、その歴史観だけでなく宗教観などとも大きく関わっている。回天詩史において歴史観と宗教観が顕著に表れている著作をとり上げ、それぞれを支えている背景を分析する。

東湖の歴史観はいわゆる皇国史観であり、歴史書として価値を置くのは『神皇正統記』と『大日本史』である⁷⁾。『神皇正統記』と『大日本史』を正統な歴史書であると認識する東湖の歴史観は、尊皇思想の中核を形成している。一方、上記で考察した通り、外夷を排除する攘夷思想は現実の脅威によって増幅され、両思想が結びついて尊王攘夷思想が確立することとなる。

水戸学において「尊皇思想」と「攘夷思想」が結びついて「尊皇攘夷思想」が形成された背景を回天詩史の記述から考察する。

時代背景や国力を抜きにして考えても、尊皇思想と開国思想が結びついた「尊皇開国思想」が成立する可能性は十分にある。皇室を中心とする国の成り立ちを尊重する思想を有する国が、海外に門戸を開き交易によって国富を増加させることはむしろ望ましいことである。また、国の成り立ちの基盤を皇室の存在と結びつけない思想の下でも、攘夷思想、開国思想のいずれも成立すると考えられる。

このように考えると、水戸学が標榜する尊皇攘夷思想は、幕末日本が置かれた特異な状況下で成立する思想であったといえる。では、幕末日本が置かれていた特殊事情の下でいかにして尊皇思想と攘夷思想が合体したのかという点が問題となる。本稿では、回天詩史の記述内容と、その背後にある藤田幽谷および徳川斉昭の思想的影響を考慮して検討を進める。

尊皇思想は、第二代藩主である徳川光圀の思想を濫觴として代々受け継がれてきた水戸藩の藩是ともいべきもので、武家の存在意義に関わる中核思想である。一方攘夷思想は、徳川幕府第二代将軍秀忠の時代に施行された1612（慶長17）年のキリスト教禁教令に始まり、限られた国以外との交易を長期にわたって禁止する措置である。

水戸藩にとって尊皇思想は藩史に根差した根幹思想であり、攘夷思想は徳川幕府の長期政策による歴史的経緯に裏付けられた思想であった。

このように考えると、攘夷思想が幕末まで思想的変換の外圧から逃れ得たのは、徳川幕府の歴史において、国内勢力の安定的均衡と

対外関係の静態的推移が270年近く両立したことが原因と理解される。国内外の静態的な均衡状態が日本における攘夷思想の成立基盤であったにも関わらず、幕末に至るまでその事実気づくことがなかったのが徳川幕府の現実であった。

この思想的矛盾に直面せざるを得ない時期に藩主となったのが徳川斉昭と配下の藤田父子であり、彼らの思想的影響を受けたのが渋沢であった。しかし、農民であった渋沢の葛藤は身分制度の矛盾に対する思いを含むものであり、為政者のそれとは異質であった。

徳川時代の国内外の事情と尊皇思想、攘夷思想の関係性をこのようにシンプルに整理すると、水戸藩が直面した問題の一端を考察することが可能となる。

3-2 藤田東湖の宗教観

東湖の宗教観を考察するためには、その全著作を詳細に検討することが不可欠である。しかし、回天詩史の中で論じられる「神皇の道」、「儒教」、「仏教」の関係性から、東湖の宗教に対する基本認識を読み取ることができる。東湖は異教としての仏教について以下のように記述している⁸⁾。

「夫れ神皇の道、聖賢の教、尤も祭祀を重んず。之を政教に配す。而して釋氏既に祭祀の權を奪ひ、之を朝野に用ひ之を政教に施す。神皇の道僅かに諸を祠官に委ね、周孔の教、降って博士の業と爲る。皇風の振はざる、大道の明かならざる、嚴として是れ之に由る。中葉以降、皇綱紐を解き、權藤氏に歸し、藤氏衰へて平氏盛んに、平氏滅んで而して源氏興る。而して兵馬の權遂に武人に歸す。後醍醐天皇陪臣の跋扈を憤りたまひ、英偉の略を

奪ひ、忠義の力を藉りたまふ。天下翕然として再び太平の隆を望む。而るに中興遂げず、其の政柄と兵權とを併せ覇府の有となる。其の間政體萬變、運に汚隆あり、而して、皇室の衰ふる所以、未だ嘗て大義明かならず、人心正しからず、異端邪説風俗を蠱惑するの故に由らずんばあらざるなり。」

東湖は、従来日本の祭祀を司ってきた「神皇の道」と「儒教」に仏教が取って代わったことによる、政治と一般庶民へのマイナス影響と武家政治の推移について述べる。

東湖は、「皇風の振はざる、大道の明かならざる、嚴として是れ之に由る」と述べて、仏教思想の不合理さではなく、仏教が祭祀に与えたマイナス影響に焦点を当てて批判する。政治権力を有する者が取り仕切る権力の源泉としての祭祀に、他国の宗教が入り込むことに対する嫌悪観が、東湖の仏教批判の根底を形成している。

この事実から合理的に推認できるのは、東湖の政治思想と宗教思想は祭政一致によって結びついており、政治権力を有する皇室が司る祭祀は、あくまでも「神皇の道」とそれと整合的な「聖賢の教」つまり儒教に基づいて行われるべきという東湖の基本認識が存在するということである。

祭祀を重んじた「神皇の道」と「儒教」のうち、後者は日本古来のものではなく、春秋時代の中国に始まる道徳規範である。つまり、東湖は儒教教義を検討した結果、その内容が皇室の重んじる祭祀をとり行う上で違和感あるいは宗教的な異物感がないと結論づけたがゆえに、儒教を受け入れたということになる。翻って仏教教義について東湖は多くを語っておらず、その内容を究極まで突き詰めて吟味

した形跡は見られない。係る事実から考察できるのは以下の通りである。

- (1) 東湖は教義内容よりも国の祭祀に対する悪影響をもって仏教を皇道に反する異教と認識した。
- (2) 東湖が容認した儒教は厳密には宗教ではなく道徳規範であることから、宗教的熱情をもって人心を惑わすことがなく、祭祀の手順に深く入り込むことがなかった。
- (3) 儒教における聖賢の言葉は八徳（仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌）から成り立っており、それは君臣関係を支える徳目で構成され、人間生活一般の規範としても有用であった。

一方、東湖にとって儒教は尊皇思想と整合的な八徳をはじめとする徳目を示すことによって、民衆を高い徳へと導く整合的な考えであった。それに対して仏教は、祭祀や宗教的儀式をともなって政治や一般民衆の考え方に入り込む危険な異教思想であった。

洪沢が論語を中心とする儒教を思想の中核に据えたにもかかわらず、仏教については積極的に肯定しないのは、東湖の影響が少なからず関係していると思われる。しかし、洪沢は仏教を一方的に糾弾するのではなく、土地に古くから根差した神社や寺による習俗は積極的に保護育成する姿勢を有していた。

洪沢は人間を超越した力を持つ神や、現在の社会を構築した先祖を尊敬する気持ちを有していた反面、同じ現世に生きる人間が特殊な能力をもってする預言や呪術、さらには縁起かつぎなどの非科学的なことには反感を持っていた。

洪沢が「天」という言葉で表現する、自分

の力が及ばないものに対する尊崇の念は、謙讓という倫理規範に根差しており、自分の先祖を中心とする先達を尊崇する精神は、礼を尽くして感謝の気持ちを忘れない思いに基づいている。洪沢は天や先祖の霊など目に見えないものを否定するどころか尊崇の念を抱いているが、それを宗教という枠にはめて現世の人間が独自の解釈で人に押しつけることに對して反発心を抱いている。

仏教、キリスト教ともに教義に含まれる倫理規範の教えについて、洪沢はむしろ良いところ取りをするがごとく自身の倫理規範に取り込んでいる。たとえば、洪沢は恕とは「己の欲せざる所は人に施す勿れ」という言葉に集約されると述べる。その一方、洪沢はこの言葉を受動的とし、キリスト教の「汝の欲するところを人に施せ」という言葉を能動的として、キリスト教の優位性を述べている⁹⁾。

このように、宗教の教義に対して洪沢はニュートラルであったが、宗教が有する他の側面、つまり、教祖の言動にまつわる超常現象や呪術性などは人びとを惑わすマイナス要素として嫌悪した。洪沢が信奉した儒教は宗教ではなく儒学という学問であった。論語で語られる教義は、人間の生活に密着した事実に基づいており、超常的な事実を一切排除した純粋な倫理規範であった。

これに対して、仏教に対する東湖の姿勢は上記で考察した通り敵対的である。このように東湖と洪沢の宗教観を比較すると、仏教をはじめとするいわゆる異教に対する考え方については洪沢の宗教観に東湖が影響を及ぼした形跡を見いだすことはできない。

第4節 藤田東湖の教育論

4-1 教育論と性善説

本節では、東湖の教育論を考察したうえで、洪沢が幼少期から受けた教育内容について検討する。東湖の教育論は性善説に基づいている。東湖は水戸藩内の郡によって風俗や土地の人びとの気性が異なる点に着目し、教育環境としての土地の重要性について語る。東湖は水戸と八田郡および江戸を例にして環境と教育のあり方について以下のように語る¹⁰⁾。

「姑く彪の目撃する所を以て之を論ぜん。八田の俗其人質ならざるに非ず。其の地静かならざるに非ず。而して其民鄙猥褻ひわいへんろうにして、超邁俊偉の氣象に乏し。江戸の俗其人勤めざるに非ず、其の見聞廣からざるに非ず。而れども其の君子は深宮の中に生れ、稼穡の艱難を知らず、其の小人は伶俐油滑の習に長じ、絶えて質直模茂の風なし。水戸の俗、慷慨義を好み、敢爲に勇なり。時に汗隆ありと雖も、之を要するに大いに江戸及び田間の比に非ず。獨り聞見寡陋と言動粗俗とを免れざるなり。是に由って之を觀るに、士苟も子弟を教育せんと欲すれば、則ちその幼なるや、これを城下に居らしめ、武を講じ文を學び、以て其の志を立てしめ、或は田野を消遙し、山水を跋涉して、以て艱難を諳せしめ、以て士氣を養ひ、其の心術士操奪ふべからざるに及んでは則ち之を江戸に出し、汎愛仁に親しみ、以て其の固陋を廣め、士君子の間に周旋して、以て其の粗俗を醫すれば、則ち天の我に與ふる所以のもの、自ら陶冶練熟し、以て大なる過不及無かるべきに庶からんか。」

東湖は八田郡の人びとの氣質を下品かつ固

陋で覇気に乏しいと批判し、江戸人の気質がある程度の勤勉さと博識を有しているのに、上級階級は庶民の苦勞を知らず、下流階級は小利口で質朴さに欠けると批判する。水戸の人びとについては、正義を愛し勇敢ではあるが知識水準が低く粗野であると評価する。

東湖は代表的な土地を選択し、そこに住む人びとの気性と教育環境を提示したうえで、子弟の教育に際しては、まず水戸で文武の基礎教育を行い、山野を駆け巡らせることによって困難を経験させ浩然の気を養わせるべきと提言する。

これらの基礎教育を終えた後、志が定まった時点で江戸に留学させて仁者と接して視野を広めさせ、人格者と交際して粗野な言動を改めさせるようにすれば、元来人間に備わっている美質が開花して円熟し、正しい人間に育つと東湖は主張する。

東湖の主張には、(1) 教育には環境が不可欠な要素として存在すること、(2) 教育環境を有効に生かすためにはタイミングが重要であること、(3) 人間には元来美質が備わっており、教育次第でそれが開花して実を結ぶことの3つのポイントが存在する。

渋沢自身が意図したことではないが、渋沢は血洗島村において東湖が重視する初等教育における文武を修得することができた。その後の高等教育は「江戸⇒京都⇒フランス⇒東京」と最高の環境を転々として多くの仁者や人格者と接する機会を得た。

しかし、初等教育は言うまでもなく、高等教育についても望んだ通りに最高の環境を得られるとは限らず、ましてや仁者や人格者と巡り合える確率はまれである。教育環境は自らが望んだ通りに得られるものではなく、したがって、教育者や身近にあっては親の役割

が重要となる。

その点、渋沢の場合は初等教育における父市郎右衛門元助と母お栄の役割が重要であった。渋沢が江戸の千葉道場への逗留を希望し、家督を継ぐ意思がないことを受容する父の度量の広さがなければ、渋沢が江戸で見聞を広める機会を得ることもなかったと思われる。

東湖の教育論において渋沢思想との共通点が明らかとなるのは、「則ち天の我に與ふる所以のもの、自ら陶冶練熟し、以て大なる過不及無かるべきに庶からんか」という記述である。これは「天の我に與ふる所以のもの」、つまり、人間が元来備えている美質はこれを陶冶すれば大いなるものに育つということを意味する。

人間に元来備わっている美質とは、将来善きものとして開化する資質を有する善なるものである。東湖は人間に備わっている資質を性善説でとらえていたと理解される。

適切なタイミングで適量の水や肥料を与えれば、花を咲かせ実を結ぶ植物のように、その種子には将来地上に益を与える美質が備わっているとすれば、人間もそれと同様と東湖は考えたのであろう。

青年期の渋沢がこの一節を読んで感銘を受けたとすれば、渋沢思想の基底を構成する性善説の淵源の一つが回天詩史に由来する可能性が存在する。

4-2 文武の修得

東湖は文武の修得に関する幽谷の教えとして、「文武の道相ちて用を爲す、偏廢すべからず。汝腐儒迂生の爲に^{なら}效ふこと勿れ。武人劍客の流に混ざること勿れ」と述べている。また、その時期については「文武の研精時を失ふべからず」という言葉を引用している¹¹⁾。

文武両道の重要性を認識し、渋沢にその道を拓いたのは父の市郎右衛門元助であった。父は6歳の渋沢に漢籍を手ほどきし、その後は渋沢の漢籍の教育を尾高惇忠に託した。また、神道無念流の剣術を修めた親戚の渋沢新三郎に12歳の渋沢に対する剣術修行を委ねた。

父の市郎右衛門元助は文武の見識を備えた豪農の跡取りとして、適切な時期を見計らって渋沢に教育を施したのである。つまり、商売のみならず文武両道を身につけることのできる環境をタイミングよく渋沢に与えたのはほかならぬ父であった。しかし、父が目指したのは、あくまでも血洗島村を中心とする地域においてリーダーの役割を全うすることができる豪農の跡取りを育てることであり、教養ある武士を育てることではなかった。

父のこの思いに反して渋沢が文武に集中するあまり、本業である農業と商売をおろそかにする態度を心配した父は、渋沢が14歳に達して以降は藍や養蚕に関する商売の手ほどきに力点を置いた。独り立ちが困難と思われた藍農家をめぐる集荷実務は、早熟な渋沢にとっては絶妙なタイミングでの修行であった。

武家に生まれた者にとっては文武両道が修得すべき全てであったが、農業と商売を本業とする豪農の長男たる渋沢にとって、文武はあくまでも基礎的な教養であった。

現代の教育制度にあてはめると、義務教育の時期に絶妙なタイミングで高度な文武を修得した渋沢は、高等学校に入学すると同時に農業と商売実務を本格的に身につけることとなった。渋沢は高校卒業時点で、「文武両道」ならぬ、「文武農商四道」の基本を身につけていた。渋沢が維新後にいわば「得手に帆を揚げる」がごとく経済界に身を投じることができたのは、文武の修得に偏向していた中学時

代に父によって進路調整が行われたからであった。

四道を修めた渋沢は、現代の大学教育に相当する22歳までの数年間で農業と商売の技術に磨きをかけるとともに、相撲の番付表に見たてた業務評定表によって藍農家に競争原理を導入して生産効率を向上させるなど、経営実務の修得にも力を入れた。

渋沢は義務教育期間に高度な文武の教養を修め、高等学校で農業と商売の技術を修得し、大学で経営実務を身につけるといって、当時では最高のエリート教育を施された。

優秀な豪農の跡取りを育てるといって父の教育目的はこの時点で達成されていた。しかし、渋沢の思惑は父とは異なっていた。渋沢の興味は日本の政治体制に向けられていたのである。漢詩の体裁で書かれた回天詩史を愛読していた渋沢が、文武に関する東湖の言葉に影響を受けたのは、文武農商四道の修得中であつた。

22歳になった渋沢は1861（文久元）年、父の許しを得て江戸の剣術修行と称して千葉道場に逗留し、尊皇攘夷思想を有する同志と議論する機会を得た。渋沢にとっては、自分の政治思想の正当性を確認するに最も適したタイミングであった。

血洗島村を中心とする地元の同志との議論は、渋沢が自身の政治思想の正当性を確認するには不十分であった。渋沢にとって自らが信奉する思想を知行合一で実践するにあたって、「知」の確からしさを確認する作業を「行」うタイミングが江戸での短期逗留であった。そのように考えれば、「文によって得た知識を武によって実践する」、つまり、「尊皇攘夷思想を横浜焼き討ちによって現実化する」という知行合一の実践を通して、文武両道を完結

させるとというのが渋沢のこの時期の心境であったと考えられる。

文武修得のタイミングに限らず、一橋家仕官、滞仏経験、大蔵省入省、第一国立銀行創設、企業の役員退任などの重要イベントのたびに、渋沢は一見不合理とも思える決断をタイムリーに行い成功をおさめた。それは、回天詩史による学びの成果もさることながら、「文」によって得た「知」を実践するにあたって過去に犯した横浜焼き討ち計画という失敗を前向きに生かしたことが影響している。

おわりに

本稿の目的は渋沢が耽溺した『回天詩史』の思想を考察し、東湖に影響を与えた水戸学の思想をたどるための端緒を探ることであった。回天詩史は東湖の思想を通して水戸学思想を考察するための入門書であり、かつ水戸学の他の文献を通して渋沢への思想的影響を探るためのいわば継ぎ穂となる著作である。

渋沢への思想的影響を念頭に置いた結果、回天詩史を（1）水戸学の尊皇攘夷思想、（2）東湖の歴史観と宗教観、（3）東湖の教育論の3つの切り口からアプローチすることとなった。

本稿で取り上げる水戸学思想を担う人物には、回天詩史の著者である藤田東湖に加えて、君主の徳川斉昭、父の藤田幽谷がおり、水戸学思想の影響を受けた人物として渋沢栄一が存在する。

回天詩史は多くの内容を盛り込んだ水戸学思想のパンフレットの性格を有する啓蒙書である。通常パンフレットにはキャッチーなフレーズが多く用いられ、読者の感性に訴えかける文章が記載されることが一般的である。回天詩史の場合は韻を踏んで書かれた漢詩が

その役割を果たした。

本稿では、回天詩史のこのような性格を勘案して渋沢が耽溺した回天詩史の思想を考察し、東湖に影響を与えた水戸学の思想を体系的にたどるための端緒を探ることを念頭に内容を検討した。その結果、同書の論理的記述が不十分な部分については、筆者の推察によってカバーすることとなった。

推認による部分に関しては、東湖に影響を与えた水戸学の思想を体系的にたどり、（1）尊皇攘夷思想に対する基本的な考え方、（2）武士道と陰徳に関する理解、（3）渋沢に顕著な影響を及ぼしたと推察される考え方の3点については水戸学思想を正確に把握すべく今後も引き続き考察を進める。

注記

- 1) 解説平泉澄、著者（注釋）名越時正『藤田東湖「回天詩史」』（名越時正先生の米壽を祝ふ会、平成14年）25-26頁。
- 2) 渋沢栄一「子路第十三第5章」『論語講義（五）』（講談社学術文庫、1977年）127頁。
- 3) 平泉、名越、『藤田東湖「回天詩史」』、7-8頁。
- 4) 平泉、名越、『藤田東湖「回天詩史」』、69頁。
- 5) 「竜門雑誌」第313号・第335-37頁（大正3年6月）渋沢青淵記念財団竜門社編『澁澤栄一傳記資料 第一巻』（渋沢栄一伝記資料刊行会、昭和30年）232頁。
- 6) 「神託」（尾高定四郎所蔵）渋沢青淵記念財団竜門社編『澁澤栄一傳記資料 第一巻』（渋沢栄一伝記資料刊行会、昭和30年）244頁。
- 7) 平泉、名越、『藤田東湖「回天詩史」』、79-80頁。
- 8) 平泉、名越、『藤田東湖「回天詩史」』、83-84頁。
- 9) 渋沢栄一「里仁第四第15章」『論語講義（二）』（講談社学術文庫、1977年）49頁。
- 10) 平泉、名越、『藤田東湖「回天詩史」』、48-49頁。
- 11) 平泉、名越、『藤田東湖「回天詩史」』、27頁。